

Ⅲ 耕地の利用状況

1 夏期における田本地の利用状況

(1) 平成26年夏期（おおむね水稲の栽培期間）における田本地の利用状況をみると、水稲作付田は163万9,000ha（青刈り面積を含む。）、水稲以外の作物のみの作付田は41万6,300haで、それぞれ前年並みとなった。

また、夏期全期不作付地は26万5,000haで、前年に比べて2,700ha（1%）増加した。

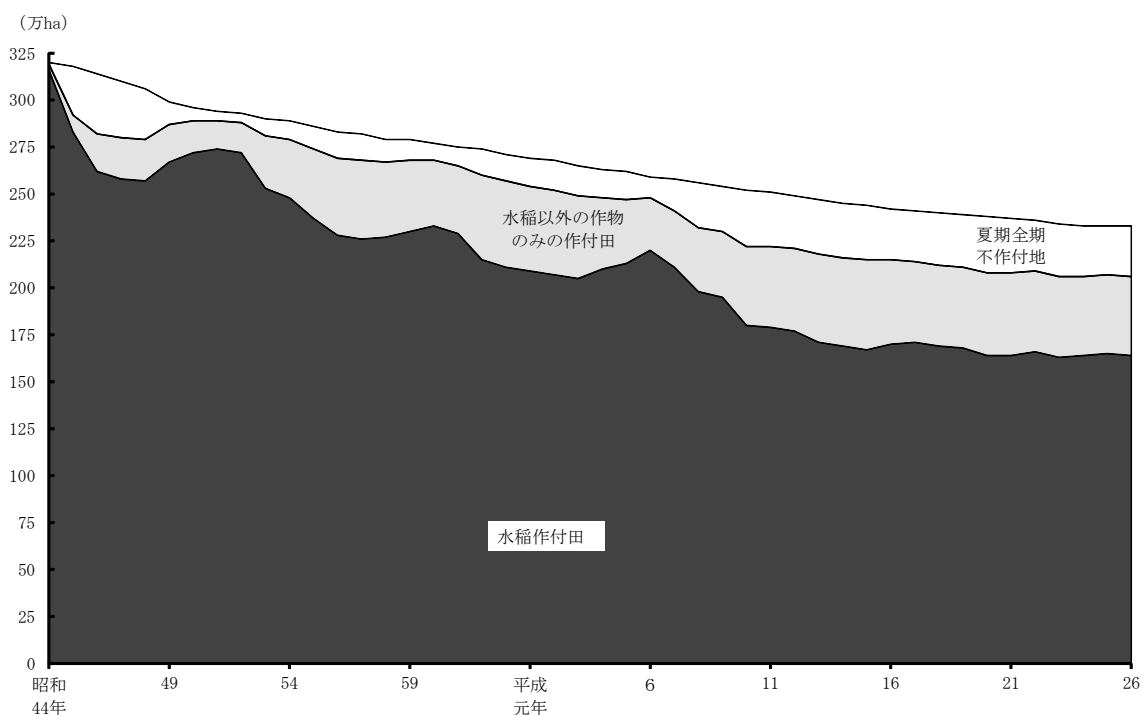
この結果、田本地に占める水稲作付田の割合は70.6%、水稲以外の作物のみの作付田の割合は17.9%、夏期全期不作付地の割合は11.4%となった（表16）。

表16 平成26年夏期における田本地の利用状況

区 分	面 積	前年との比較		構成比
		対 差	対 比	
	ha	ha	%	%
田 本 地	2,320,000	△ 6,000	100	100.0
水 稲 作 付 田	1,639,000	△ 7,000	100	70.6
水稲以外の作物のみの作付田	416,300	△ 400	100	17.9
夏 期 全 期 不 作 付 地	265,000	2,700	101	11.4

(2) 夏期における田本地の利用状況の動向をみると、昭和45年に米の生産調整が実施されて以降、米の生産調整面積の変動による増減はあるものの、水稲作付田は減少傾向で推移し、夏期全期不作付地については増加傾向で推移している（図12）。

図12 夏期における田本地の利用状況の推移



2 農作物作付（栽培）延べ面積及び耕地利用率（平成26年）

(1) 田の農作物作付（栽培）延べ面積は227万3,000haで、前年とほぼ同数であった（表17）。

田の耕地利用率は92.5%で、前年並みとなった（表17）。

(2) 畑の農作物作付（栽培）延べ面積は187万4,000haで、前年に比べて1万3,000ha（1%）

減少した（表17）。

これは、飼肥料作物、果樹、野菜等の作付（栽培）面積が減少したためである。

畑の耕地利用率は91.0%で、前年並みとなった（表17）。

(3) この結果、田畑計の耕地利用率は91.8%で、前年並みとなった（表17）。

表17 平成26年農作物作付（栽培）延べ面積及び耕地利用率

区 分	田 畑 計				田			畑		
	作付（栽培） 延べ面積	前年との比較		耕 地 利用率	作付（栽培） 延べ面積	前年との比較		作付（栽培） 延べ面積	前年との比較	
		対差	対比			対差	対比		対差	対比
	ha	ha	%	%	ha	ha	%	ha	ha	%
作付（栽培）延べ面積	4,146,000	△ 21,000	99	91.8	2,273,000	△ 7,000	100	1,874,000	△ 13,000	99
水陸稲（子実用）	1,575,000	△ 24,000	98	34.9	1,573,000	△ 24,000	98	1,540	△ 320	83
麦類（子実用）	272,900	3,300	101	6.0	168,800	2,100	101	104,100	1,100	101
かんしょ	38,000	△ 600	98	0.8	2,810	△ 100	97	35,200	△ 400	99
雑穀（乾燥子実用）	61,400	△ 1,500	98	1.4	38,300	△ 1,800	96	23,000	200	101
豆類（乾燥子実用）	181,000	2,500	101	4.0	116,300	1,500	101	64,700	1,100	102
野菜	530,400	△ 2,700	99	11.7	142,000	△ 200	100	388,400	△ 2,500	99
果 樹	233,800	△ 3,200	99	5.2	-	-	nc	233,800	△ 3,200	99
工芸農作物	151,200	△ 1,500	99	3.3	6,360	△ 270	96	144,900	△ 1,200	99
飼肥料作物	1,019,000	7,000	101	22.6	198,500	15,400	108	820,800	△ 7,800	99
その他作物	83,600	△ 700	99	1.9	26,200	△ 400	98	57,400	△ 300	99
耕地面積	4,518,000	△ 19,000	100	nc	2,458,000	△ 7,000	100	2,060,000	△ 12,000	99
耕地利用率	91.8%	0.0ポイント	nc	nc	92.5%	0.0ポイント	nc	91.0%	△0.1ポイント	nc

注：耕地利用率とは、耕地面積を「100」とした作付（栽培）延べ面積の割合である。

$$\text{耕地利用率（％）} = \frac{\text{作付（栽培）延べ面積}}{\text{耕地面積（7月15日現在）}} \times 100$$

(4) 作付（栽培）延べ面積の動向をみると、昭和40年代は麦類を中心とした水田裏作の減少に加え昭和45年から始まった米の生産調整による不作付地の急増により、田を中心に大幅に減少を続けてきたものの、昭和49年以降は麦類の生産振興による作付回復等からほぼ横ばいで推移してきた。昭和60年以降は麦類に加え豆類等も減少し、平成10年からは米の需給調整対策の推進等から麦類、豆類等の作付けは増加したものの、総体的には減少傾向で推移している（図13）。

(5) 耕地利用率の動向をみると、昭和40年には123.8%であったが、その後も低下傾向で推移し、平成6年には100%を下回った。その後は平成11年に、前年に比べ0.3ポイント上昇したものの、ほぼ低下傾向で推移し、平成23年以降はほぼ横ばいで推移している。（図13）。

図13 農作物作付（栽培）延べ面積及び耕地利用率の推移

